

ンターネット歌会（二〇〇五年）などに関わっています。また「心の花」外では、谷岡さんと同人誌「ノベンタ」（一九九〇〜二〇〇二）、菱川さん等と現代短歌研究会（二〇〇一〜〇八）、東大の本郷短歌会（二〇〇六）の発足に関わってきました。

もちろんホームページでは横山未来子さん、現代短歌研究会では田中綾さんなどの地道な仕事を支えてくれる人がいたからできたわけですが。

自己分析してみると、高校、大学の体育祭や部活が楽しかったので、そのノリでやっているところがあります、まあいろいろと到らぬ点はあると思いますが。

谷岡 海外詠も多いですが、旅行は仕事で行っているんですか？

大野 以前は高校生のホームステイの引率や、海外の青少年政策の調査をしていた。

そこでベトナム反戦運動の渦中で暗殺されたロバート・ケネディの墓参りなどもしました。

また個人旅行でインドに行った時には、行く前に谷岡さんからいろいろと教わって、現地の特別な飲み物を飲んだりして、スッポンの血を飲んだ時のように視力が良

くなるだけで、特に酩酊して幻覚を経験するようなことはありませんでした。

ガンジス川のほとりでポーとしていると、聖地だから学校の先生が生徒をつれてきて片言の英語で話しかけてきたりするんですよ、日本の話題はヒロシマとエレクトロニクスなんです。

谷岡 ベナレスのガンジス川には、チャイの行人もいて。

大野 そうそう、かなり甘いホットテイなのに、不思議に美味しいんですね。

谷岡 二人ともベトナムへも行ってます。われわれの青少年時代はアジアでベ



トナム戦争があつて、いろいろと考えられましたよね、旅行では当時の地下トンネルの跡などへ行きました。

あとはイスラエルも印象的でした。

谷岡 短歌の話に入っていくと、歌集は名前に四季を入れて、五年ごとに出していますが。

大野 最初から計画的にそうしたのはなく、一九九五年に「秋階段」を上梓した時にそう思ったんですよ。出す気運が高まったら出そうなどと思っていると、私の場合いつになるか分からないし。

「心の花」の毎月の八首×十二ヶ月×五年十たまーに来る依頼の歌の五百何十首から約三百首を歌集へ載せるのが自分には合ったペースだと思っています。まあいつまで体力を維持して続けられるか分かりませんが、掲載にあたっては、かなり加筆修正しています。

歌集名に四季を詠み込んでいるのは、季節がめぐりその中でさまざまな良き人と出会う、という考え方が好きなんです。

谷岡 社会的アプローチを入れて、評論集も二冊出していますね。

大野 短歌と俳句の合計約一六〇〇の結社